

ぼんすけもふる里も守りたい 「ぼんすけ育成会」

幼い頃、当たり前のように溜池で一緒に泳いだ「ぼん（シナイモツゴ）」。

この70年で激減し、今では国内最大級の生息地域である長野市の茶臼山周辺溜池群（日本重要湿地の一つ）でも約1割のため池にしか生息していません。

戦後、農業を取り巻く環境の変化・化学肥料や機械化、基盤整備、減反政策、農業離れ、担い手の高齢化による農環境の手入れ不足などで棲める場所が少なくなり、社会の変化と共に生息数も減ってしまったとの事。平成28年シナイモツゴの保護回復事業が策定されると知り、「ぼん」ことシナイモツゴをシンボルに里山環境を守る「ぼんすけ育成会」を平成28年1月に立ち上げました。

信里の基幹産業は溜池を水源とする稲作とリンゴ栽培です。溜池は「ぼんすけ」の生息池なのです。当会では水路の整備や溜池周辺の草刈り休耕田利用の米作り、ぼんすけの観察会や勉強会を行い、各種イベントにも参加するなど地域内外に向けて様々な発信をして、住民みんなで守れるよう努力しております。

またぼんすけが生息出来る健全な環境で育った農産物をぼんすけ米やぼんすけリンゴとしてブランド化し農家の生産意欲を高めたい、ぼんすけが棲める安全で美しいふる里を守りたいと願っています。

（代表 小林和子）



ぼんすけ田んぼの畦にて“ちょっと一休み！”

BOOKS 読書案内

『植物はそこまで知っている』

ダニエル・チャモヴィッツ著・矢野真千子訳

（河出書房新社、2013年、187ページ、1,600円＋税）

植物は人間の様な感覚をもっているのだろうか、記憶はできるのだろうか、コミュニケーションはとれるのだろうか…。

植物は明るい方に向かって生長し、花の中には太陽を追いかけて向きを変えるものがある。食虫植物のハエトリグサは葉で虫を捕まえるが、その際、感覚毛と呼ばれる器官と短期記憶を使って虫の大きさを確認して捕まえやすい大きさの虫を捕まえているという。また、毛虫の襲来を受けたヤナギは周囲のヤナギに「気をつける」と警告を発することがあるそうだ。

身動きできない植物は、たくさんのかんじを感じて、その場で対策を取らなければならない。本書は、そんな植物たちが生き抜くための様々な感覚について、人間の感覚と植物の感覚を生物学的に照らし合わせながら教えてくれる。

（石田祐子）

